

看護のフォークロア ― 回収された病人の世話 ―

齋藤修平

はじめに

《参考事例》 昭和34年に72歳でおばあさんは亡くなりました。おばあさんは丈夫で達者な働き者で米や麦を作っていましたが、亡くなる年の1月に目が回るようになり、お医者さんに行ったら血圧が高いので仕事を休むように言われ、家で縄をなったりしていました。当時は今みたいに血圧は減多に測りませんでした。そして、昭和34年4月に脳溢血で倒れ、半身不随になり、半年間寝たきりになりましたが、ちっとも良くなり、半年後の10月に亡くなりました。かなり、脳溢血がつよくきちゃったそうです。脳溢血で倒れると男は右、女は左がきかなくなると言われています。その頃は脳溢血で倒れる人がたくさんいました。私の従兄弟も血圧が高く、脳溢血で一晩で亡くなりましたし血圧が高い血統なんでしょうね。

おばあさんが寝込んだのが4月で、ちょうど田植えが終わった後だったので、野良の方は比較的楽な時期でした。おじいさんがまめな人で奇妙なほどにつきっきりで面倒をみていて、周りの人からは愛妻家だんて言われていました。私も手伝おうとするのですが、「娘にさせたんじゃどんなことをされるかわからない。」と言っていました。昔は電気も十分でないので、おじいさんは明るくなれば起きて、暗くなれば寝るという生活で面倒をみていました。本当は入院させればよかったのかもしれませんが、田舎では入院する人はあまりいませんでした。それでも、病院にいるのと同じように時間的に世話をした方がいいだろうということになって、時間を決めてご飯をあげたりしていました。肉は高かったので、おばあさんも嫌いだったので買えませんでした。昔は山羊を飼っていて山羊の乳をあげたりもしました。肌着は毎日取り替えましたし、寝間着が汚れば替えました。歯磨きは塩をつけて磨きましたが、毎日はやりませんでした。寝ているとネコウシ（床づれのこと）ができて体が崩れてしまい、おばあさんは相当苦しかったそうです。大きな脱脂綿をネコウシのできたところにバカッとつけていましたが、しまいには背骨が見えるほどになりました。おばあさんが寝込んでから、野良は私が中心にやりました。夫は国鉄に勤めていました。嫁に行った娘が近くに住んでいたので、時々家に来て、おじいさんと話をしたりしてくれました。孫の中学生の息子は、男の子だから全然関心がないで、声もかけませんでした。

お医者さんを頼むとオートバイで来てくれましたが、お金がかかるので、いよいよでないと頼めませんでした。昭和34年当時に一回頼めば200円、今のお金で一万円か二万円ぐらいかかりました。お医者さんは注射をして帰るのでハチ（蜂）という仇名がついていました。おじいさんは、おばあさんが急に亡くなってがっかりしてしてしまい、それからは野良もしなくなり、6年後に死んでしまいました。

(滝ノ入 大正7年生 女性)

いつのまにか、病いが「病気」という語彙にすりかえられて医学の言説に囲い込まれてしまった。ふと変調（ちょっと具合が悪い）というシルシで立ち現れた病いが、〇〇病とか〇〇症候群（医者にとっても少し厄介な相手だ）に変換され、医学があらかじめ用意していた疾病分類に組み込まれていく。分類され、病名が付与されると、「そういうことなのか」と私たちも一つの了解と安心を得るような気分になる。そんな環境が出来上がってから久しい時が流れてしまっている。また、家族で面倒を見るといった、病人の世話（あるは世話焼き）も「患者の看護」という制度化されたような大仰な呼称に移行されてしまい、病む人を囲む環境もすっかり様変わりしてしまったように思える。もう、「寝ていればそのうちに治るよ。心配かけてすまないね。」なんて襖越しに蒲団の中から聞こえてくる科白も遠い風景となっている。

病い、看病そして死に対して過剰なドラマ性を求めているわけではないが、医学の言説からほど

よい距離をおいて、もう少し違った意味を探していく試みも、何故か欲しいような気持ちとなっている。亡くなることが、亡くなることの原因が、身体のメカニズムとしてのみ語られるようじゃ、しょうがないよ、と思うからだ。

それから、看護とか介護とか在宅医療とかケアといった語彙が日々、活字となって踊っている点も気になっている。制度としての看護って、看護婦さんが医師に対抗している点も見えてはくるものの、結局は医師と看護婦（で代表されるような医療関係者群）が薄暗いところで癒着した関係ととり結び、しっかりシステム化され、完璧に仕上げた後から「望ましい看護」とやらいきなり私たちの前に登場してくるようにはしか思えてならない、というのが今の筆者の気分なのである。

さて、このところ民俗調査と称して通わせてもらっている埼玉県入間郡毛呂山町で、筆者は医療を一つの柱として聞き書きを続けている。なぜに、医療を一つの柱に設定したのか、ということだが、病いとなって、それを治すために適当な行動をして、治す。あるいは治りきらないけれど病いをうまく手なづけてしまう、あるいは残念ながら亡くなってしまう、といった、誰もが体験する医療のプロセスの中にフォークロアを見いだしてみたいと考えてきたからである。

本稿では、病人のセワヤキ（世話焼き）に関して、三つの事例を報告してある。このフィールドで筆者は少し前まで、それぞれの家（農家が圧倒的に多かった）で病人の世話がどのように行われ、その世話焼き（面倒を見る）行動がどのように、当事者あるいは周囲の人たちに解釈されていたのかを探ってみたいと考えたからである。大袈裟な表現を許してもらえれば、「病人の世話」はいかに語られるかを探っていきたいというふう考えたのである。病人の世話は、家族という身体に突如、登場したマイナスの記号なのだろう。とにかく、家族は病人の世話という仕事を抱え込むことになる。周囲の者は自分が患った病いとは違ったシーケンスを展開していくことになるようである。とにかく、少し前のこの土地の人たちは、平均寿命も短く、まあ60歳過ぎまで生きれば長生きという範囲に入れられ、少しの間を病んだ後に、きまって秋から冬に亡くなっていくというのがきまりであった。「秋は農繁期ということもあってか、働きに追われ、疲れて死んでしまう」のであり、「冬はとにかく寒かったからね。」というふうに秋と冬を死去の季節として説明をしている。

さて、今回の課題は年寄りが寝込んでから亡くなるまでのいわゆる世話焼きあるいは世話することをめぐっての言説の記述だが、これまでの調査では「嫁の仕事」（嫁が世話するのは当たり前という位置づけ）として語られることが多かった。この世話を嫁が担当することで、姑や舅との確執を含めた交流の様相（孝行物語りとなる）、夫の協力ぶり、世話と農作業（野良）との両立の苦勞、病人の態度の変化、おしめの替えなど世話の具体相、病人食、病人の部屋、医者嫌いの病人、世話する当人に注がれる近隣の眼差し、往診する医師との交流、死去の直前の症状と対応、臨終、葬儀という項目が続いていくのである。つまり、病人の世話のストーリーは家というトポスに家族・親族関係、近隣関係など多様な社会関係を浮上させながら、物語られていくのである。病人の世話というテーマにはあらかじめ語られるべき項目が多く内包されている、というわけである。病人の面倒をみる、あるいは世話する現場に関わった家族たちの言い分（事例）を通じて、多分だが、世話する家および家族が病人をどう理解し、病人を世話するということをどう捉えているのかを明らかにできるのではないかという予測を立てたわけである。

現在、新しい病人像の出現がいま話題となり、問題化されているが、医療に囲い込まれる以前の、最後の家族のなかの医療化されない病人の世話（これは医療化されない死ということでもある。）像を見いだしていければと考えている。主な調査地は毛呂山町の山間部に部落が延びている滝ノ入と阿諏訪を選んである。とりわけ阿諏訪が今回の調査の舞台となっている。滝ノ入と大類ムラの資料は比較のための参考事例の提示と考えたしだいである。ただし、与えられた紙幅の関係で提示した資料は少ない。

調査地の概要

阿諏訪は町の中心地である毛呂本郷から約一里ほど山間に延びる部落である。蚕と麦と米を作ってきた地域で五反耕作すればなんとか食っていけると言われており、少し前までは山間部の隅々まで田圃が整地され水稻栽培が行われ、養蚕、麦づくりも盛んな土地柄であった。

阿諏訪は、^{にんや}仁谷、東、中山、中、前、後の六つの字から成り立つ戸数が約120戸で構成されたムラである。字内は、仁谷の場合を例にとると、19戸で構成されているのだが、小峰組、安藤組、紫藤組、初野組というようにそれぞれのイチゾク（一族）と呼ばれる本分家関係の単位で組分けされており、冠婚葬祭をはじめ濃密な付き合いを組内で展開されている。

この仁谷で今日までの「病院での死」（病院で家族の一員が亡くなった）の事例について調査してみると、半数の10戸の家では未だ家族が病院で死去することを経験しておらず、また病院死の場合も近くの埼玉医大病院には、家で世話していたが亡くなる寸前に（いよいよ家族では手に負えない）入院して死去した事例が4戸、防衛医大病院その他の病院に入院後に亡くなった5戸を数えるにすぎない状況にある。病院に入院して亡くなった場合の事例も家で往診をしてもらいながら世話をし、「よくよくしょうがなくなって」家族が救急車を呼び、その結果入院して死去ということで、病院での死去事例もその大半は昭和50年代に入ってからということであった。「家の床柱のあるところで死ぬ」（自宅で死去することをこのように表現している）ことがまだ理念として強く語られており、病人を家で世話する事例（世間話となって語られる）が多いというわけである。

したがって、いわば特殊な死に方である入院死についてはこのムラでは二つのエピソードが流通している。「昭和21年にこの部落でMさんがはじめて近くの病院で亡くなった。唐子の岩田病院に腸捻転で運ばれた。リヤカーで2時間ぐらい家族や親戚の者が手伝って入院させた。大病で入院して、そのまま亡くなったんだ。その時分は盲腸などは唐子によく運んだ。その時分は毛呂病院ではなかった。埼玉医大病院ができてもしばらくは医大に入院する風潮はなかった。」とか「終戦直後、麦蒔きの最中だったから11月だった。東京の上野の鶯谷の病院に入院していた人がいた。二ヶ月ぐらい入院して手術後に亡くなった。親戚だからリヤカーを引いて迎えに行ってくれと頼まれた。その家に奉公した人と亡くなった人の兄さんと分家の人とで迎えに行ったことがある。午後の7時ごろ阿諏訪をリヤカーで出発した。空襲で焼け野原になった東京の町を尋ねながら鶯谷を目指した。夜明けの3時にたどりついた。奥さんが待っていた。リヤカーに亡くなった人を乗せて布団や毛布をかけて戻って行った。池袋からは川越街道を利用した。そして夕方の4時ごろに到着した。近所の人たちも川越まで迎えに出てくれたが、じつは川越ですれ違ってしまい、近所の人たちは大井まで

行ってくれたそうだ。翌日は葬式であった。病院で亡くなるとリヤカーで迎えに行くのが助け合いであった。

病院の死はそのまま、亡くなった人の迎えという仕事が親戚や近隣の大きな仕事となったわけである。「入院させるということは、お金がかかるということと、入院したって家で世話するぐらいしか出来なかった。家で養生（栄養つけること）することの方がよかった。咯血すれば鶏の血を飲む、しまいには鯉の血を飲む、カワガラスの黒焼きを食べさす、葛湯、お粥にかつぶしみそ、重湯、牛乳、たまご（鶏卵）、りんごをすったものなどを食べさせるぐらいであった。今考えれば特別な病人の食事なんかなかったけれど、それぐらいしか出来なかった。」という時代の説明であった。

三つの事例 ― 医学的な対応ではない病人の世話 ―

〈事例1〉Nさん（大正11年生・男性）の事例

Nさんは明治25年生の母のスエさんを平成5年9月に亡くなるまで世話した経験をしている。父親（明治22年生）は昭和10年に47歳で死去している。その時、母は43歳であった。

母は丈夫だったんだが、亡くなる前の4年間の世話をした。雪の降った夜に電気毛布を使ったが熱すぎて風邪ひいてしまい、それから下の具合がわるくなった。それ以来、世話することが多くなったのでNさんは食事の日記をつけはじめた。見舞いに来る兄弟たちにおばあさんがこのぐらい食べたよと見せてあげようと思って書きはじめたそうである。平成2年1月からオムツをかえはじめた。また、夏にはアツケにあたって（暑気当たり）寝込んだりしたこともあった。数日間は何も食べずであったが、三度の食事を口元まで運んであげてヤシナッタ（食べさせた）結果、デホーダイ（ひっきりなし）の暑い年でもあったがどうにか乗り越えた。それから平成5年9月29日に亡くなるまで約4年ほどオムツをかえていた。長病みしてからも、はじめの頃はよく食べた。だが、だんだんに食べなくなった。しまいは食べ物果汁と重湯だけになった。

病人の寝ているところはヘヤが多かった。ヒネオバーサン（曾祖母）の時は年寄りが病気になると万年床となるから、奥のヘヤが使われることになった。年寄りが亡くなるころはだいたいヘヤであった。このヘヤは出産をする場所でもあった。親の世話は「今いっぺん丈夫にしたい」、という気持ちで養生したものであった。ヘヤだと姥捨山のようなだからデイに寝てもらった。デイは家で一番いい部屋だからここがいいと思っていた。昔は少しの病いなら、デイで寝かせたが長病み（長患い）になり、回復の見込みもなくなると日当たりも悪いが、奥のヘヤに移った。布団も綿の入った布団も使ったが、長病みしていると、ネコウシが出来てしまい、それを防ぐことの意味もあって、亡くなる前には藁布団を昔はよく作った。これを敷いてから普通の布団を敷いたことを覚えている。便所が外であったから、オカワ（便器）、尿瓶を利用していた。その時分は、いっぺんぐらい医者にかけてあとは薬をもらう程度であった。

オバアサンのネコウシは、はじめは治ったがしまいにはどうしても治らない。「どことこの誰さんはネコウシがこの頃出来たそうだ」、というと死ぬ前触れのようなものであった。

年寄りは寝かしておいて、家族はみんな畑に行くから、姥捨山というと語弊があるけど、「とても駄目なんだ」、「年で駄目なんだ」ということで至れり尽くせりという面倒はその時分は見られな

かった。「順に行くんじゃ仕方がねえや」ということであつた。夫婦だとか子どもだと連れ添いと
か親がずっと世話するが、親の世話は気持ちもあつたが余裕がなかつた。紙のおむつがない時は布
おむつを川で洗っていたりして、時間がなくて大変であつた。

よく亡くなるとまわりの人は「さずかつた食べ物を食べ切っちゃたんだんべ、神様から一生の食
べ物の量を授かつたいるんだ、食べきつたんだから亡くなつたんだ。」と慰めてくれたが、「細く長
く食っていればもっと生きられたんじゃないか。控え目に食べていれば、もっと生きられたのかも
しれない」と思ってしまった。「食べるとこっちが気持ちがいいんだ」というわけで世話する方は
食べてもらうことが嬉しかった。「あれがよかんべ」という気持ちで毛呂山に売ってなければ、入
間市のまるひろ（デパート）まで出かけておばあさんの好きなものを買に行っていた。デイに寝
ていたが、ザシキにはって来て、テレビを見ていたがだんだん起きて来られなくなった。おふくろ
を十分に世話したから亡くなつた後は疲れが出ちゃつてもうとても葬式もようやく出来たような状
態であつた。施主だから相談かけられるわけだがどうにも疲労困憊でまいつた。「これ以上長く生
きていると私の体が悪くなっちゃう」からと、おばあさんは死んでくれたのだと思う。医者にかか
りきりで（往診をしてもらつた）、病院へは一度も行かなかつた。しまいには熱が出てしまつた。
アイスノンをいくつも買って来ては体に当てたが少し経つと熱が上がり下がらなかつた。この熱は
どこから出るかと医者に聞いた。おむつをかつている（使っている）と腎盂炎という病気になるそ
うだ。腎盂炎の熱の薬を貰っていたが、亡くなる前の熱は違つていた。先生もこの熱はわからない
という。熱がしまいには取り切れなかつた。火葬場で知人から「人間の体はコンピューターで体温
を保っているがコンピューターが壊れると熱が出れば出っぱなしになる。」という話を聞いて、同
じ経験をした者が言っているのなるほどそういうことかと、はじめてわかつた。医者もわからな
いと説明してくれなかつたことが、はじめてわかつたのですっきりした。それでも精神的にしばら
く変であつた。オーバーサンは百一歳と5ヶ月で亡くなつたのだから、他人は悲しまなくてもいいじ
ゃないかと言つてくれた。しばらくは写経をしていたが、秩父巡礼を思いつた。妹が案内してく
れた。四回に分けて秩父に行った。本当にその時分はおかしな気持ちが込み上げてしまつていた。
「あきらめなくちゃしょうがない」と言つてくれた人がいたがやっぱり駄目だつた。巡礼したり写
経したり、月日も経つたからこのごろはさっぱりしたけど。人は百歳なんだからかえつておめでた
いと言われていたけど、駄目でしたね。いろいろと親に勉強させてもらつた。白寿のときには観音
様を作って庭の隅に建てておいて本当によかつた。うまくヤミノシテ（患つた後に回復する）くれ
ればと思つたが。」

〈事例2〉Hさん（大正3年生・女性）の事例

隣りの部落である大谷木の家から昔で言う21歳のときにお嫁に来た。阿諏訪で農家、山林経営を
していたダイジンと呼ばれるような家に嫁いできた。当時は珍らしかつたが自動車を利用して嫁入
りをしたそうである。家にはオジイサン（夫の父）オバアサン（夫の母）がいた。この夫の両親の
世話をしたHさんの体験談である。Hさんはお二人の世話をして、お二人が亡くなつてしまつたと
きに「人生の半分を姑に仕えた。私は亡くなつたときに、あゝこれで私の人生の半分の仕事は終え
たなと思つた。悲しくなかつた。嬉しかつた。」というのが率直な感想であつたという。

「野良は嫁に来てやりました。大谷木の家（実家）ではうんと金が入るだろが、うんと百姓をしてもらわなくてはいけない。」と言われたそうである。実家では作男が泊まり込んでいたので、農家の仕事はあまり自信がなかったが、「寅年生まれであったので反発して頑張ろうと思った。頭のいい家だからいいなと、思ってこの家に嫁入りしたけどオンナシ（女衆）は小舅も姑も意地悪なので苦労した。ニクゲはないのだが、嫁というのは他所から来たものだから、嫁というのは憎らしいものだ、お前も嫁を貰って姑なればわかる。」などと言われていた。

嫁に来て、3年目に酒を飲む血統だから、脳溢血で舅が倒れた。越生で倒れたので、大谷木の医者診察に行った。結納をきまってから自転車がきかない（自転車が利用できないような山の部落であった。）ところだから嫌だなと思ったぐらい陰しいところに家があった。右がきかない体になったので、大工さんに寝台をつくってもらって足掛け5年ほど寝ていた。オクザシキに寝ていた。ご飯は家族と同じで、いつもおかずには魚を付けていた。「病人の世話は嫁がするのが当たり前」だとおばあさんが言っていた。おばあさんは面倒を見るのが嫌いであった。自分の旦那さんであっても嫁にまかせきりであった。おじいさんは奥座敷に真藁を敷いて大便をしていたので、それでオバアサンが両足を持ちあげて、私がかってやいて、拭いてやって捨ててとといったことを足かけ5年ほど世話した。丸3年は寝たきりで、それでもオサシミなど食べすぎることがあって、下から出してまわりを汚しちゃうし、ボケていて、大便をつかむなど大騒ぎであった。タライに湯を汲んで縁側にニナツキテ（介添えしながら連れて来て）、おじいさんを湯に入れたことがたびたびであった。当時は23、24歳ぐらいであったが、世話することは嫌だと思わなかった。立派な便を出す。「品評会にだす」などと言って笑っていた。ご飯を持っていくと必ず私に「ばか」と言ってから、あくびをして、それから笑ってからご飯を食べていた。しまいには「お昼ですよ。ばかが持ってきましたよ」などと笑わせた。「夜は片身を3人でもんだ。それが一番楽しいそうだったですね。体の左がきかなかったから。きかないところは男は左だといいますね。女は右あしだといいますね。」

「三度の食事と下の世話にならないで死んでいける神様があったけど、それがいいですね。おばあさんが世間話とか近所の噂話をおじいさんに聞かせると、嬉しそうに笑っていた。湯に入れてから爪切りと耳の掃除と頭を刈ってやる、それから髭剃りが嫁の仕事だったが、ありがとうと誰にも言われたこともない。だいたい病人の一切の世話をしましたね。子どもに乳くれながらおじいさんのご飯のおかわりなどの面倒を見た。おばあさんは手伝ってくれなかった。おじいさんはデイにずっといた。デイは家では陽当たりがいい一等の座敷だからね。お風呂は、縁側でタライで洗ってあげていた。おばあさんと二人でおじいさんをオクザシキ（デイのこと）の寝台からになってきた。下の世話はおしっこだけはオクザシキの近くに便所があったから自分でやっていた。大便はオカワ（ごみ取りみたいなブリキの便器）でした。とにかく、病人が出ると、水枕、油紙、吸い飲みなどを近くのカッパ屋（雑貨屋さん）で買い揃えるものであった。下の世話は嫁がするのが当たり前で、新聞紙を切ってよくもんで拭いてあげた。歯はみがきません。どうかすると塩で自分でやっていました。ネコウシはできなかつた。ゴムマットでネコウシは防いでいた。体が弱ってくるとできる。ネコウシは自分で寝返りできる人ならばできない。おばあさんが頭のところで針仕事をしながら、おじいさんに世間話をしていた。私の夫は世話を一切しなかつた。

五代前から酒飲みの家だったから、お見舞いは親戚は次々に来るけど近所は揃って倒れてから一週間ぐらいたったらジギ（お見舞いのこと、お仁義のことか）に来た。餅菓子をお見舞いに持ってきた。リンゴも持ってきた。花を持ってくるようなことはなかった。病院にだって昔は花を持っていくようなことはなかった。花を持っていく習慣はなかった。食べ物とお金であった。病人の枕元にお茶を持って話をして帰っていった。午前中が見舞い客が多かったからお昼にはうどんぶちをさせられた。近所の人のお見舞いは一回だけしか来ないが後はオンナシがおしゃべりにいかがですと声を掛けてくれたお茶を飲んで行ってくれた。来てくれたの話だが、頭で倒れた人はよく食べる、と言っていた。最後は食べたものは口から出ないけど泡だか唾だがよく出たのでおかしいと思った。なんとか先生が言っていたかを聞く。たいしたことはないと答えておくと安心していた。亡くなる時におかしいと思って、子どもたちに連絡した。寝ているとなんだか鼻がまがったなと思ったことがある。寝間着の着替えは一週間にいっぺんぐらいであったが、そういうのはおばあさんが洗っていた。病人のものは病人のもので洗濯した。分けてしないととんでもないことだ。しまいにはスプーンでやしなって（口元まで食べ物を運んで食べさせてあげる）あげた。病人の世話は嫁の仕事であったし、おじいさんは馬鹿というのが口癖であったから、ありがとうということは一度もありませんでした。畑の仕事、夕飯の支度仕事と忙しかったが「社会に出たらどんなに荒波にあっても切り抜ける」という内容の答辞を卒業式で読んだことがあったので、「これが荒波かな」と思ったりしていた。ここで弱音言ったら世間で笑い者になるからね、あの馬鹿どもをお前が直してみろと誰かに言われたり、姑と小姑とが意地悪でどうしようもなかったが、おじいさんは「嫁というのは褒めるものではない、嫁というものは黒いものを白いと言われても嫁は口答えするものではない。」といつも言っていた。「あなたは大変ですね。ご苦労なさいますよ。」近所の人に言われたとき、私のことを分かってくださる人がいたので元気づけられたこともあった。近所に嫁さんの方が姑より強い人がいた。ああいう人はろくなことがないなと思ったら毒飲んで死んでしまいましたね。

とにかく、おじいさんが亡くなったときにはほっとした。世話がなくなってよかったな思った。おばあさんにはにこらしい言葉ばかりだったけど、死ぬ少し前に「家（うち）じゃHさんがいなきややっていけないや」と言っていた。あれはいい言葉だったね。一度倒れてよくなって、しまいの方でしたが、「うちじゃHさんがいなくちゃどうしようもないや」と感謝のようなことを言っていた。

おばあさんは一度倒れて具合がよくなってから自分の葬式をするように庭をすっかり一回り草むしりして、しまいには裏の味噌蔵の屋根まで上って屋根のゴミを掃いていた。お父さん（夫）があぶないよと注意していた。屋根にのぼって、それから庭で倒れてしまい、二人の孫が縁側に寝かせた。掃除して綺麗にしてからおばあさんは死んでしまった。だから、おばあさんを面倒みることは少なかった。倒れると近所の人が来てくれた、近所の人が私を励ましてくれるようなこともあった。今が一番いい。今の若い者は、結婚しても、年寄りはいらないというそうだけど、そんなわけだなと思った。それから、酒飲みで、私が心配していたおじいさん（おじいさんさんの弟）が死んだときは畑まで来て、話をしに来て、それからしばらくして死んだ。イトマゴイ（暇乞い）に来たようだった。あれを後に残しちゃ大変だから、よかったと思って泣いた。また、一役終えたなと思った。もうたくさんですけど、あれだけいじめられなかったら人の苦労はわからなかったと思う。本当に

いじめられたがあれがなかったらお他人様に深い思いやりがなかったな。知らないから耐えられたのかも知れない。

〈事例3〉Aさん（明治42年生・女性）の事例

昭和4年に越生から嫁入りして阿諏訪に来了。箆笥一棹、夜具戸棚、裁ち板、針板、箱枕、下駄箱、電気アイロンを嫁入り道具で持ってきた。

夫は昭和38年に58歳で脳溢血で倒れ、昭和60年に亡くなった。夫は七ヶ月で生まれた子どもで（七ヶ月に生まれた子は投げても育つ、と言われていたそうだ）、夫の母が虚弱でお乳がでないで、お米のとぎ汁を飲ませて育てたそうだ。お米ふやかして、のめっこくなるまで摺鉢ですってものをおっぱいの変わりに作って飲ませた。夫が昭和38年に倒れてから死去するまで、その間ずっと世話をした。「死んだ後はおばあさんを頼む」と夫は死んで言ったという。

倒れて以来、21年と10ヶ月（80歳）の間も世話をした。血圧で倒れた。はじめはやさしいだろうと思ったいたが、往診してもらって治療したが、頭は治ったが立ったり歩いたりはできなかった。当時は入院なんてどこでもよほどのことではなければしなかった。毛呂病院も往診をしてくれた。倒れてから15年間ぐらいは杖を使って庭先まで散歩させた。当時は珍しかったが自動車も買って親戚などに遊びに行った。阿諏訪には2台しかなかったころだった。倒れてからテレビを見るのが楽しみとなり、野良から見たい番組のチャンネルを切り替えるために戻るのが私の仕事であったが、やがてリモコンが出来て、いちいち戻らなくてすむようになっては本当に助かった。ネコウシは割りと出来なかった。「こんなに長く寝ていてよくネコウシが出来なかったね。よく世話ができた」、と病院で言われた。ネコウシを作らないことは大変であった。お風呂は風呂場までゴザをしいて手を引いて連れて行って、入れた。倒れてから5年目に大きな発作が来て駄目だと思ったので親戚中を集めたが自然に治った。それからは毎年一度ぐらいは発作が来ていた。下の世話はオシッコは大丈夫であったが、便の方は世話をした。食べ物はなんでも食べていた。煙草は暇で好きだったけど、一人で吸っていて火の不始末で火傷でもしたら、不用心だからということで止めてもらった。飴で口をまぎらわせていた。へやで面倒を見た。私もヨマイゴト（愚痴）は一切言わなかった。近所では（私たちは）夫婦仲がいいと言われていた。亡くなる一ヶ月前だけ毛呂の病院に夫を入れた。病院で夫は「おばあさん（自分）のことを頼む」と家族に言ってくれていた。動かないのでずっと便秘症であった。寝ているから重い体を立たせて便をさせた。発作が毎日くるようになってしまっとうちじゃどもにもならなくなった。心臓の発作を繰り返した。震えが体中にきた。膝を押させて背中をさすってやった。「自分（私）の体が駄目になるから病院に行ってくれ」といったら入院してくれた。「家にいるほど病院じゃ世話はしてくれねえよ。」と言っていた。看護婦さんは「心不全が来たら（発作が来たら）二、三日ですよ。ここまで体がよく持った。」と言っていた。食事はいつものように普通にとっていた。体の様子はレントゲンでわかったようだ。看護婦さんが「一生懸命みてあげてください。」と言ってくれたが、「結構です。十分面倒みましたから」と言ったんです。順送りというか仕方がないことだった。農家は野良があるから他所の方を頼んで仕事をしてもらった。蚕と田圃と麦で6月から7月からが一番忙しくなった。やがて、発作の強いのが来て亡くなった。心残りになるようなことはありませんでした。

以上、年寄りの世話をめぐって三つの事例を提示した。一つは息子が母親を世話した事例であり、二つめは舅と姑を嫁の立場から世話した事例、三つ目は妻が夫を世話した事例であった。それぞれの病人の世話の言説は世話する人とされる人との関係を反映させながら、これまた、それぞれの深さで解釈されていったことが理解できる。

異変を症候から徴候に移行させることもなく、臨床医学の知からも遠いところで語られ、語り得る経験として世話する行為がムラや家族という器のなかに内部化されていったわけである。この三つの事例は少し昔の人たちが共有していた、「年寄りの世話」から喚起される想像力のフレームを示している。決して3人の年寄りの世話をめぐっての感性が特別のことではなくて、町の人々が保持していた感性なのである。

Nさんは101歳まで生きた実母の世話を日々、何を食べたかという食事の日記をずっと記しながら、白寿のときには記念の観音様を屋敷に建立して祝い、家族の中で中心的に世話をしてきた。母の死後は茫然自失の状態が続き、写経と秩父巡礼で心を癒していった。天寿を授かった食べ物をすべて食べたことで説明してくれた。Hさんの事例は、舅と姑の世話を嫁の大きな仕事と位置づけて働き、近所の人からの「あなたは大変ですね」という励ましの言葉と、病に倒れた姑の「家（うち）じゃ、Hさんがいなきゃやっていけないよ」という言葉による主婦権の移行によって、大変であった経験を意義深い経験に変換させ、さらには、人の苦労がわかる人間へと成長する契機であったとふうに理解していった。最後の妻が夫を世話したAさんは、夫の感謝を「おばあさんを頼む」という言葉を受け取りながら夫婦仲がよくなったことをはにかみながら、受け取って、長期間の病人の世話を自動車、テレビという文明の利器を活用しながら面倒をみていったわけである。

おわりに

《参考事例》 父親同士が兄弟で、母親同士が姉妹という間柄の親戚の家が同じ部落にあった。Kさんは従兄弟にあたる夫の家に26歳のときに嫁入りした。このとき、すでに夫の母親であるトリさんは脳溢血で左半身がきかない状態であった。Kさんは自分の母親の姉であるトリさんの世話を約10年間することになった。

嫁入りしたときはすでにトリさんは具合が悪かった。「他人から来たんじゃこのオーバーサンのことがわからない、すぐ近くならいろいろわかるから」ということでKさんは嫁に来ることになった。百姓家だから手がある（労働力が必要）から、とも言われた。麦刈りのときだけ、その頃は8時ころまでは外が明るいです。慣れているからね。外（野良）で仕事ができた。オーバーサンは、そうになると（仕事で遅くなると）手がきかないから、起きていて待っているしかなかったんです。野良から戻ってくると、「何してんだよ外で、家で待っているんじゃ容易じゃないや」と言われて、野良の仕事も手伝わなきゃならないし、家の中は暗くなっちゃうから用を足さなくちゃいけないし大変だった。この時のオーバーサンに文句を言われたことは今でも忘れることができない。デイにトリさんは布団を敷いて寝ていた。昔は蚕していたから、家中で蚕を飼っていた。オーバーサンのところは蚕でも大丈夫であった。デイは蚕のときでも使わなかった。オーバーサンは外を歩くとコロバル（転倒）ことがあった。コロバルとしばらく寝ていた。食事は普通のを食べていた。寝ているときはお粥を作ってあげていた。風呂は入れてやった。昔の風呂は脚が持ち上がらないと入れないから、夫とかついで入れたり出したりした。風呂はよく入った。着替えは一人じゃできなかった。朝起きると襦袢をキチンと着るから着物をちゃんと着せた。食事は専用の台を作ってお膳を並べていた。夜は下の世話したが、昼間は小のほう一人でしてきた。大便是オカワで取ってあげた。オーバーサンの世話だけじゃなく、蚕もやっていたから大変だった。今のように病院でも産めば、一週間も戻らないで寝ているけど、その時分は家でお産していた。自分で産湯を汲んできて産んでいたからね。

オーバーサンの具合が悪くなったとき、竹の内の伊里先生に往診を頼んだ。寝ているように亡くなった。いま

だにその時が忘れられない。でも、オーバーサンからは感謝の言葉はなかった。亡くなったときは、蚕は外（桑畑）に食べ物（飼料）があるからそれを取ってこなくちゃいけないから大変であった。麦、米、蚕の仕事は今のよう機械がないので大変であった。その思いをすれば今は楽だ。今のよう水道から水が出るわけじゃないし、井戸からの水汲みもあった。オーバーサンが寝ている時は、爪切ったり、顔剃ったり、細かい梳き櫛で髪をすいてあげると清々すると言って喜んでくれた。歯の手入れは手伝わなかった。オーバーサンは長く世話したけどオジーサンもやっぱり脳溢血で倒れた。私の長男が産まれたときに、それをおぶって、いつもと違う部落の細い道を歩いていったという。あれが、後から考えるとオジーサンのイトマゴイ（暇乞い）であったと思う。なんとも口きかないで死んでしまった。ネコウシは出来なかった。あんまり長く寝ていなかったからね。世話の仕手（担い手）が来たからということで、喜んでいたが、おじいさんの面倒を見たのは短かった。

昔はね、野良から家族が戻るまで、病人は一人で暗くなっても上がり端に座っていた。薬は飲まなかったね。治療というのはなかった。なっちゃえばなっちゃったでという感じであった。オーバーサンは不自由な体でも機織り仕事で指をよく動かしていた。また、家のまわりをよく歩いていた。倒れると隣組はお見舞いにお金を持ってきた。お見舞いは隣組としては一回だけであった。時々、近所でどうだこうだという噂話を聞かせてあげると、オーバーサンは寝込んでいて見ていないからよろこんだ。
(大類 昭和5年生 女性)

本稿の目的は、提示した三つ事例と二つの参考事例のように、病んでいるお年寄りの世話をした家族が、紡ぎだしてくれた看護の体験物語りに耳を傾け、語ってくれた方々が自分たちの看護体験をどのように考えてきたかを探ることであった。家族のなかに病人が出る、すると残った元気な家族がそれぞれが世話の役割を追加しながら野良仕事に精を出す。こういったことは、この土地で暮らしてきた誰もが経験してきたことである。だがそこで問題となることは、病人を世話する家と家族の態度であるかと思う。それは、自ずと病人を、あるいは病むことをどのように捉えてきたかということに照らしてくれることになるからである。伝統的な病人の世話をめぐる、この土地の感性（曖昧ではないんだけど、なんと非実体的なものなのだろう）というものを把握しようと努めるとき、まずは語ってもらって、それを記述してみて、そこから、「このような課題とすべき対象があるんだ」（課題の発見）という円環的な手続きを進めていくしか方法がないかなと思う。

病人の世話は家や家族にとって厄介でやわらかな危機であった。否応無しに対応を迫られる、その対応を根っこで支えるこの土地の固有の世話の観念を発達させてきた。伝統的な家意識、親孝行、舅や姑に仕える嫁の立場を表出させながら、また、妻と夫が互いに献身的に支え合う夫婦仲、世間体といった観念が世話の場面をつねに強調されて物語られていったのである。

参考文献 新村 拓・『老いと看取りの社会史』、法政大学出版社、1991

C・エルズリッシュ、J・ピエレ（小倉孝誠訳）・『〈病人〉の誕生』、藤原書店、1992

川本隆史・「介護・世話・配慮」、『現代思想』所収、11月号、青土社、1993

松永澄夫・「病む身体の関係性」、『現代思想』所収、11月号、青土社、1993

A・コルバン、（小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳）・『時間・欲望・恐怖——歴史学と感覚の人類学』、藤原書店、1993

『談 [夏号]』、たばこ総合研究センター、1995

追記・現在、県立精神保健総合センターの新井（新姓鈴木）良美さんによっても、毛呂山町の看護のフィールド資料が蓄積されつつある。鈴木さんのフィールドデータからは主婦に家族の衛生・栄養など健康管理上の仕事をすっかりまかせている状況が判明しつつある。主婦権には家族の健康という財布を預かる意味もあったのだと思う。かくして、病人の世話という制度は、ジェンダー・スタディーズと直結していくことになる。なお、鈴木さんの村の看護をめぐるのレポートは『オープン・フォーラム』（オープン・フォーラムの会）の2号に近日中に掲載される予定となっている。死が医療化されない時代の世話をめぐるの言説の回収と解釈が望まれるところである。冒頭の滝ノ入の参考事例は鈴木さんのご協力を得ている。